

# 子どもの育ち

～MIMAMORU アプローチ～



## まえがき

### MIMAMORU アプローチ

「見守る保育」の一つの目的は、子どもと保育者との距離感を考えるものです。かつて、保育者は子どもと向き合うように子どもの前に立ち、一斉にある知識なり技術を子どもたちに伝達することが役目でした。しかし、子どもたちの自主性、自発性を重んじ、その活動を環境から保障しようという新教育運動が大正時代に起こりました。その時に、子どもが自発的に向き合うものの多くは、教具であり、遊具であったのです。しかし、そこからだけでは、人とかかわりを学ぶことはできません。しかし、当時はその力の養成はそれほど問題にはなりません。それは、人とかかわる力の多くは、社会の中で学んでいたからです。家族の中、地域の中、その中で多様な大人たち、異年齢の子どもたちと接することで学んでいきました。しかし、少子社会になり、家族は核家族化し、きょうだいとのかかわりは減ってきました。地域におけるネットワークは希薄になってきました。

人類は、もともと社会を形成して生きてきました。様々な機能も社会の中で発達するものが多くあります。人とのかかわりから生きる力を学習してきました。しかし、日本における現代社会において、その場が減ってきています。そこで、考えなければいけないものが、人と人とのかかわりのあり方であり、人と人とのかかわりを促す環境です。人と人との距離感を表わすのに、日本では古くから「見守る」という関係性を表わす言葉がありました。

そこで、子どもを主体として捉え、子どもの自発的な活動を保障し、子ども一人一人の特性を大切に、子ども同士の関係を重視する保育をするための、子どもと保育者の距離感を見直してみようとするのが「見守る保育」です。

子どもたちは、大人、社会から見守られながら子ども同士の関係の中で成長していきます。そして、その育ちの過程の中で、就学時における姿を10の姿として示されています。この冊子では、その目安を切り口として、子どもたちの生活を見つめています。子どもたちの育つ力のすばらしさを感じられます。

ギビングツリー代表 新宿せいが子ども園 園長 藤森平司

## ア 健康な心と体

保育所の生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

保育所保育指針より

○子どもたちは、自ら活動する内容を選択し、自分の思い通りに行動します。時には他の子の迷惑になったり、トラブルを起こすこともあります。大人は、そういった子どもの行動を、善悪だけで判断するのではなく、どうしてそういう行動に至ったかのプロセスに注視し、子どもの思いに寄り添った対応が必要になります。自分の思いに寄り添い、受け止められた経験が、健康な心を育てていきます。



ほくが ほくが

なぜ？挑戦できるかって  
受け止めてくれる存在がいるから



けんかは 心を育みます



○子どもたちの生活する環境には、心と体を思い切り発散できる適切な環境と気持ちをおちつかせることのできる環境が必要です。自分の心の状況に応じて自分で適切な環境を選択することで健康な心と体を育みます。子どもたちは、セミバイキング方式で給食を頂きます。ご飯やおかずの量を自分で選択できることができ、強制されない環境の中でお友だちとの会話を楽しみながら頂きます。楽しい食事の中で、健康な心と体が育ちます。



自分で食べること お友だちと食べること  
がとても大切です

いつもと違う場所で食べるだけで  
楽しいよね



自分が食べたい量をえらんでいます



ランチルーム

食事の時間によって子どもたちの遊びを中断させないように、ランチルームを設けています。楽しく食べることが、食育の一番大切な要素だと思います。



○「子どもの思いを表現するおたのしみ会」子どもたちは、行事の中で、自分の今の思いを表現します。歌ったり踊ったりの種類の中で、自分がやりたい踊りを選択し、時には、周りのお友だちや保育士と相談しながら、振り付けを変えたりして参加します。自分から参加することによって育った力を、おたのしみ会で表現します。



ほくは 劇苦手だから  
楽器配り役です



もっと ○○した方が  
いいんじゃない



自分で選んだ おゆうぎだから  
はりきります



## イ 自立心

身近な環境に主体的にかかわり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動できるようになる。

保育所保育指針より

〇子どもたちは、主体的な活動を保障された中では、周りにお友だちと相談したり、まねしたり、時には失敗しながらも、自らの力で工夫し、達成感を味わうことが出来ます。大人が子どもたちの意欲を信じ過剰に干渉することなく、子ども自ら達成感を味わうことで、自立心を育みます。



乳児のころよりお友だちを意識しています



先生は 後からついてきてよ

〇子どもたちは、自分がやりたいこと、興味のある環境の中で、自由に活動します。時には、夢中になりすぎて衣服を汚したりします。環境の中には、活動の中で起こる排泄の失敗や汚した衣服をお着替えしたりする場所も発達段階に応じて用意されています。自分で最後までできる環境の中で自立していきます。自立とは、なんでも自分でできるようになることではありません。できないことを人に頼んだり、困っていることを互いに助け合うことも大切です。



自分でやろうとするときは意志を尊重し見守ってあげよう



できないことは お友だちに頼めることも大切



汚れてもいいよね おもしろいことに没頭する体験が多いほど 集中力が身に付きます



人は、人とかかわりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切に  
 する心を育てるとともに、自主、自立の態度を養っていきます。そして、他の  
 人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を  
 養います。そこで、園の中では子ども同士の関係がとても大切になります。

先生どうやるの  
 教えて



大丈夫 痛いところない

これ なんだろうね  
 みんなで調べてみようよ



## ウ 協同性

友だちとかかわる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

保育所保育指針より

○子どもは情緒が安定すると、自然に他の子どもとかかわりを持とうとします。その中で、ぶつかり合うことがしばしば見られるのですが、他者に認めてもらえた体験により自然と譲り合うことや、他者の考えを受容できるようになりながら、互いに協力し合う姿が見られるようになります。保育者は、それらの行動を踏まえ、「協同的な学び」ができるよう配慮を行うことが大切です。まずは、幼児のすべてを信じることが大切です。

幼い頃より相手の気持ちを  
感じ取りかかわることができます



自分の提案が受け入れられることにより  
相手の気持ちを受け入れることができるようになります

○乳幼児は好奇心旺盛な存在で、いろいろなことにチャレンジしようとしていますが、興味関心は、個々によって違うものです。個々が集中できるような環境（ゾーン）を用意することにより、「やりたい」という気持ちを表現することが大切です。自分のやりたい気持ちが認められることで、次第に他の幼児の邪魔をすることは少なくなり、協力し合う姿が見られてきます。保育者は、幼児の協同性が育めるよう幼児の取り組みや会話を邪魔することなく、あそびが発展できるように見守ることが大切です。



適度の人数とスペースがあると  
子どもたちは集中しあそぶ  
ことができます

興味関心が継続できる  
環境が必要です





○やらせる行事から協同性を育める行事の進め方として幼児が行事へ参画できる機会を与えましょう。幼児は、行事の意味がわかると、自分の考えを表現しようと沢山の発想を展開させます。子どもたちが個々に自分の考えを伝え発想する時に、互いの意見の違いに気づき、調整しようとする姿が見られます。保育者は普段から子どもたちの自由な発言を温かく見守りながら、気持ちの代弁やあそびの調整をし、子どもたちの発想を形にできるアドバイザーになることで、協同性が育まれます。



何冊もの絵本から  
自分が行いたい劇を話し合えます



子どもたちが納得できる日数を決め 製作にかかると分担された事柄を真剣に取り組むことができます。





## エ 道徳性・規範意識の芽生え

友だちとさまざまな体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友だちの気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友だちと折り合いを付けながら、きまりをつくったり守ったりするようになる。

保育所保育指針より

○乳児の社会的行動の発達には、親や保育者など様々な大人との関係によって出現します。そして、自分が十分に容認されているといった確信が、次第に我慢をすることにつながり、自分の行動を保障される確信が、次第に自己の勝手な行動を抑えて集団に適應するようになるのです。



まずは子どもとの信頼関係を築くことが大切です

大人の立ち振る舞いすべてが子どものモデルになります



○子どもが、自分の欲求をコントロールするようになるための大人の対応としては、子どもの欲求を適切に満たすことです。すなわち、子どもが自立するためには、大人が子どもに我慢させるのではなく、子どもが自分で我慢する力をつけていくということです。またそれは他者への共感であり、思いやりです。



乳児から自分で選べる環境が必要です

それぞれの個性を生かし  
チームで子どもを見守ります



園では多様な人間関係を経験します

○ゾーンはその日によって開ける所(○)と開けない所(×)があります。最初は保育者が決めますが、やがて子どもたちが「なぜそこは×なのか」「何時までなら使えるか」などと交渉するようになり、子どもたちだけで○×を決める時間帯も出てきます。子どもたち同士の話し合いで、あるゾーンは「昨日きちんと片付けがされてなかった」という理由で×になり、「今度からきちんとするから使わせて」という交渉により、翌日から再開されたりしています。



子どもが自発的にあそべる時間と空間を用意します  
読書ゾーン 製作ゾーン 癒しのゾーン等

日にち 時間帯により開閉があります 話し合いで決めることもあります



読書ゾーン



ゾーン 子どもが興味関心を持ったことが自らやれる空間です。子ども自身の興味・関心によって作り上げられ、変化し、増えていきます





## オ 社会生活とのかかわり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々なかかわり方に気づき、相手の気持ちを考えてかかわり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、保育所内外の様々な環境にかかわる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

保育所保育指針より

○まずは保育者自身が社会の一員であるという意識を持っていなければなりません。そして、世の中にはさまざまな人たちがいて、さまざまな職業があり、さまざまな生き方や価値観があり、その一つひとつ、一人ひとりが意味のある存在で、自分もまたその中の一人である、ということを知覚しておく必要があります。



(夏祭りを一緒に楽しむ保育者と保護者)

保育者も保護者も社会を構成する一員として 地域を盛り上げていきます

園のおやじの会での地域行事参加は 社会参画の良いモデルとなります



(ペーロン大会に参加するおやじの会)

○ままごとや変身などのごっこあそびは、子どもたちが自分の周りの社会をあそびを通して模倣し、その役割になりきれあそびです。自分がやりたい役割を選択し、いろいろな役割のあるお友だちとのかかわりの中で、自分が役に立っているという喜びを感じ、時には相手の気持ちも考えながらあそびが発展していきます。子どもたちが社会を経験するには、社会を再現するあそびの環境が必要です。



ままごとは家庭の役割の貴重な再現の場 お母さんの役割を模倣する場となっています

給食のお当番活動を通して 自分に役割があり 役に立っているという喜びを感じることができます。



○町探検などでは、スーパーの店員さん郵便屋さんなど、地域のさまざまな役割の人々と出会います。その中で、自分の興味のある情報を引き出したり、得た情報をお友だちに伝えたりします。このように子どもたちは園内外の多様な大人や子ども同士の体験から社会を学んでいきます。そして、成長とともに社会の一員としての意識を持ち自分の役割を見つけていくのです。(シチズンシップ)

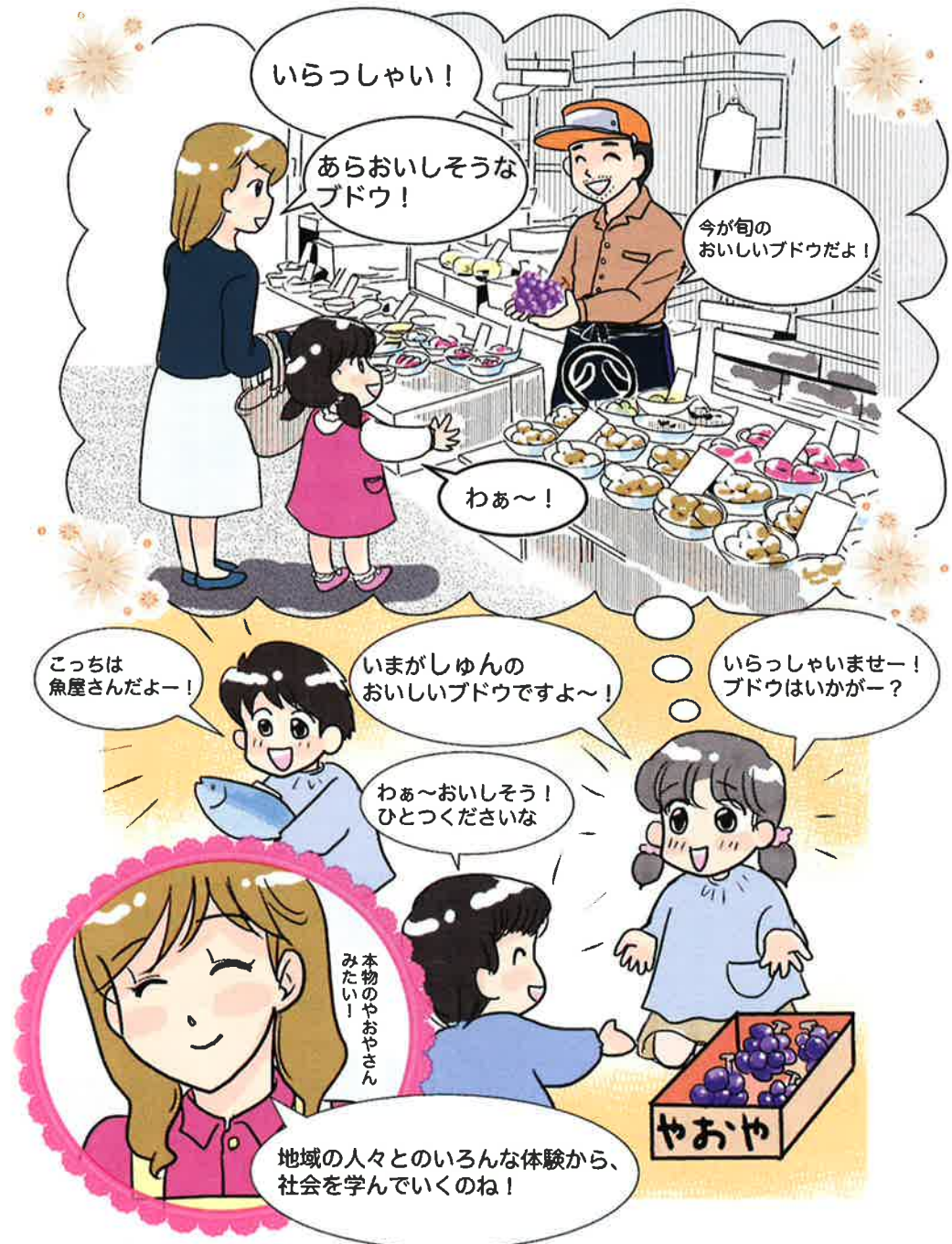


町の働く人に会いに行き いろいろな話を聞いたり見たりする体験は 社会を学ぶ第一歩

いろいろな役割があり 興味・関心がある役割に憧れをいだき あそびに取り入れたりします



シチズンシップ(教育) 市民としての資質・能力を育成するための教育。子どもは、多様な大人、子ども同士の体験から社会を学んでいきます





## カ 思考力の芽生え

身近な事象に積極的にかかわる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様なかわりを楽しむようになる。また、友だちの様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

保育所保育指針より

○子どもはさまざまなものを発見し、科学者と同じ探究心を働かせ、想像しながら環境に働きかけトライ＆エラーを繰り返しながら社会を学んでいます。子どものあそびや活動が豊かなものになるように大人はそれらを手助けします。また、思考力が芽生えるような保育環境の構成を行うことも大人の大切な役割になってきます。その中で、大人や子ども同士、地域の人など、いろんな人と話をし、工夫や予想をしたり、多様な考えを見たり聞いたりしながら思考力が深まるようなかわりを保障することが大切です。



子どもたちが探究心をもって想像し  
トライしてみるあそびの環境とそれ  
を見守る保育者の視点が必要です

自分と違う考え 方法があることに  
気付く大人の仕掛けも大切になって  
きます



○思考力の芽生えを育むには、子どもの主体的な活動としての生活を保障する保育を行うことが大切です。主体的な活動とは、自ら課題を見つけ、考え行動するという事です。それらが実現できる数種類のゾーンニングされたあそびの環境が必要になってきます。



積み木ゾーンで納得いくまであそび  
こむ子どもたち  
(積み木ゾーン)

子どもは小さな科学者であり その  
発想と活動を保障する環境と保育  
者の見守りが必要です 時には大人  
が意図しない行動や考えにも共感  
してあげることが大切です

(科学ゾーン)



○運動会のリレーなどでは、どうしてもっと早く走れるか、カーブの曲り方やバトンの渡し方をどう工夫するかなど、子どもたち同士で考え話し合ったり教え合うことで思考が深まります。行事等を計画する中で、できればだけを目指すのではなく、子どもたちの気付きや工夫を取り入れ、さらには子ども同士が話し合うことでさらに考えを深めていけるような取組みと見守りが大切です。



まずは自分たちでやってみて  
考えて 失敗しても またトライ  
します



少し難しいことも異年齢であそぶ  
ことで 年下が年上を見たり 年  
上が年下に教えることで 学ぶこと  
はたくさんあります





## キ 自然とのかかわり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちかかわるようになる。

保育所保育指針より

○子どもにとっての最高の遊具は自然界にある火・水・木・土だと言われています。自然とあそび、自然を利用することによって養われる感性や想像力が、人や自然、命に対する「優しさ」や「思いやり」を育みます。保育者は、手足や目（視覚）、耳（聴覚）、舌（味覚）、鼻（きゅう覚）、皮膚（触覚）、五感のすべてを使って、楽しくあそびながら自然に親しみ、自然を愛する心を育てられるように、空間や活動を組み立てることが重要です。



頭のとっぺんからつま先まで  
全身で自然を感じましょう

ガサガサしたり しっとりして  
いたり おひさまのにおいがし  
たり・・・あー気持ちいい



○高低差のある地面、水の流れるところ、草むら、木々の間には、動植物の命があり、子どもたちのあそびや発見の可能性が無限にあります。運動会のための平坦で広い園庭ではなく、そのような要素を取り入れた園庭や自然でのあそびは、運動機能の向上はもとより、自然に対する科学的理解の基礎を培います。また、協調性や創造性、判断力を育みます。



小さな命との出会いや別れを通して  
命をいたわり大切にすることを育ち  
ます。



「何かいるよ」「なににな」「あ、  
てんとうむし」虫や草木の変化に  
季節を感じます



段ボール一つで斜面がすべり台に 子  
どもたちの気づきや発見が あそびを発展  
させていきます



○子どもたちは、自然の中で無意識のうちに五感をフルに働かせています。例えば散歩では、朝露に輝く蜘蛛の巣にみとれ、ほおに暖かな風を感じたり、耳をすませば、小さな鳥のさえずりに気づきます。そして、自然と小鳥のうたを口ずさんだりするのです。寒い日は、踏み出す度にサクサクと音をたてる霜柱に好奇心をそそられ、図鑑で調べ、園庭での氷づくりが始まることもあります。表現や科学に結びつけていくことのできる環境が、自然のなかにはたくさんあります。保育者も、五感を研ぎ澄まし、子どもたちと一緒に自然を感じとり、不思議さを感じたり、感動したりしましょう。



さまざまないきものたちの営みを観察することで 子どもたちの科学的理解の基礎が作られます



氷のレンズを覗くと どんな世界がみえるかな



子どもたちの探究心を引き出す ような言葉がけや、環境設定が 大切よね!



## ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

保育所保育指針より

○ヒトの新生児は白紙状態であるという概念は、世界中の発達心理学者が却下し、時代遅れとなりました。では、新生児は何をもって生まれてくるのでしょうか？ その一つが数に関する能力です。数には、数量という「量」を表わす場合と、「順序」を表わす場合があります。ヒトは生後早期から数量の判断、数えることなく物のまとまりの数を即座に判断する能力があります。順序は、多いまたは少ないという関係性に関する基礎的な理解で、数量に関する理解の獲得後、乳児期後期に発達するものと思われています。これらの力を伸ばすために、子どもたちは遊びを通して「数」を体験する必要性があるのです。



世界に耳を澄まして 言葉の海の音を聞き取ります



「ねえ読んで」「うん、いいよ」  
たくさんの読み聞かせてもらった経験が 言葉のコミュニケーションを広げていきます



○言葉を話したり書いたりすることは、自分と他人の間「関係をつくる」ということで、心と心を交流する営みなのです。図鑑や科学関係の本、文字・数などに関係する本を置いたり、実験をしたり、磁石や数字のパズル、カードなどであそべるようにし、生活のなかで自然と文字・数に親しめる環境を用意します。あいさつをかわすこと、絵本を読むこと、けんかをすること、手あそび歌をうたうことなど、日常生活の折々を、小学校の学習へつなげる興味・関心の基盤づくりとします。



自然と文字・数に親しめるパズルやカードゲームを 自分たちで手に取れる場所に用意します



環境設定の工夫で生活のなかで文字・数に親しんでいきます



野菜の収穫でも 重さやサイズを測って比べてみます



〇子どもたちは園での生活の中で、生まれ持った数の感覚を養っていきます。しかし、算数についてアレルギーを持っていたり、学校へ行ってからでいいと思いがちです。幼児期に一番大切なことは、数についての具体的なイメージをしっかりと持つことです。園の生活の中で、目で見て、手で触って、実感していきます。



おかいものごっこあそびの経験から 数を数えることへの興味が深まり 実際にお店でお金を使ってみる体験も大切です



自分の手を使って体験することで 数に親しんだり 物の形の違いに 気づいていきます





## ケ 言葉による伝え合い

保育士等や友だちと心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

保育所保育指針より

○赤ちゃんは、お母さんの胎内にいる時から、お母さんの声を聴き、生まれてお母さんに抱かれた時から耳から音として聞き取り、言葉によらないコミュニケーションが始まるのです。次第に意味を知り、片言の言葉で自分の意思を表現しようとしていきます。3～6歳になると言葉による表現力がぐんぐん育っていきます。



保育者と子どもたちでミーティング



子ども同士で対話しながら進めます

○3・4・5歳児の保育室には、子どもたちが自由に話し合いに使える場所があります。集団生活にはみんなで力を合わせるという良さがある反面、必ず意見のぶつかり合いがあります。そんな時、ピーステーブルを使うのです。ここへは、当事者同士が自ら行って話し合うこともありますし、仲裁しようとする子どもがその場へ連れていくこともあります。



ピーステーブル

(園によっては名称が異なります)

この場所でのルールや今の気持ちを表せるように環境を設定します



自分の気持ちを伝え  
相手の話を聞いています

○発表会などの行事を行う際に「セリフを一生懸命覚える」「言われたとおりに演じる」「辛くても練習する」ということばかりが強調されてしまうと、保育指針等の言葉の領域における発達とは全く違うものになってしまうことをしっかりと自覚し、慎まなければなりません。保育指針等の言葉の領域に「楽しさを味わう」「喜びを味わう」「心を通わせる」とあるように「楽しさ」がすべての土台になっていることが分かります。つまり発表会などの行事を行う際も「楽しんで」「喜んで」「自ら進んで」行うことが大切なのです。



子ども同士で教え合います



自ら進んで楽しく取り組みます





## コ 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友だち同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

保育所保育指針より

○子どもたちは無意識のうちに、五感をフルに働かせてあそびに集中しています。子どもたちは無意識なのですが、保育者はこの部分に関して人、物、場という環境を構成していきます。そのために保育者には子どもの表現を読み取る力、共感する力が求められ、そこには心のゆとりが必要となります。



保育者には子どもの声や表情 行動をよく理解し 表現を読み取るとともに 共感する力が求められます

子どもの表現を受け止め 理解するためには 保育者の心に「ゆとり」が必要です チーム保育をすることで「ゆとり」が生まれるとともに 複数の視点で より深く子どもを見ることができます



○「やらされる」ではなく、「自分の好きなことをやれる」更には「自分の好きなことを見つけられる」環境が必要です。子どもが主体的に活動することで、集中力も深まり、持続し、あそびはますます発展します。科学ゾーン、ままごとゾーン、楽器ゾーン、製作ゾーン、ブロック・積木ゾーンなど音・光・自然等、様々な素材の特徴や感じたことや、考えたことを自分で表現できる、友だち同士で表現できる環境が必要です。



子どもはさまざまな遊具・教具・自然環境に触れ 発見し 感動し 自ら興味関心を広げ 深めていきます より多くの環境との出会いが必要です

自分で表現すること 友だち同士で表現することの楽しさに気づき 遊びは更に発展していきます



○行事を語る上でよく使われる言葉に「達成感」という言葉があります。辛いことをやり遂げた「達成感」というのも、その前提として必要なのは「自分の意志で自発的に取り組めたか」ということです。何らかの活動（行事・演技・遊戯・種目など）自体が「悪い」とか「やるべきでない」というのではなく、嫌で仕方がない子が出てしまっていないか、またその子に無理をさせていないか、という検証が必要です。「昔からやっていたから」という理由だけで検証をしないしていると、知らぬ間に子どもにとって保育者にとっても活動が苦痛になってしまう事態になりかねません。取り組みにあたっては、それを始めた原点に戻って、「何のために始めたのか」ということを考えてみる必要があります。子どもたちが得意なものに楽しんで取り組み、表現する喜びを味わい、意欲を持つことのできる行事となるよう工夫していきたいものです。



自分たちが表現する内容を 保育者から一方的に押し付けられるのではなく自分たちの話し合いの中で決めていきます

子ども自ら決定した表現は 完成に向けてのモチベーションも高く 主体的に練習にも取り組みます





## 臥竜塾セミナー グランプリ受賞ポスター について

ここからは、新宿せいが子ども園で開催されている「臥竜塾セミナー」の参加者が、10の姿を伝えるために作成したポスターを掲載します。

さまざまな保育施設で日々見られる子どもたちの姿には、「10の姿が育っているな！」と感じる場面が多々あると思います。これらのポスターを参考に、日々の保育で「10の姿」を切り口に、子どもたちの生活を見つめていきましょう。

## (ア)「健康な心と体」



### エピソード

写真の子は、0歳児クラス後半で、髪の毛がサラサラ。幼児クラスの子もたちは本児が登園するとすぐに駆け寄り頭を沢山撫でたり、関わったり。とても人気者です。本児も幼児クラスの友だちが好き。自ら近寄って後を追うようになりました。

園庭で異年齢で遊んでいた日。初めは幼児クラスの子もたちが本児に関わり遊んでいましたが、急に気分を変え木登りの方へ行ってしまう。本児はハイハイで追いかけますが、山の途中で諦めて、幼児クラスの子もたちが楽しそうに木登りをしている姿をしばらく眺めていました。

その姿が「いつか登って一緒に遊びたいな」と背中からにじみ出ているように感じ、このポスターをつくりました。

志木どろんこ保育園

## (イ)「自立心」



### エピソード

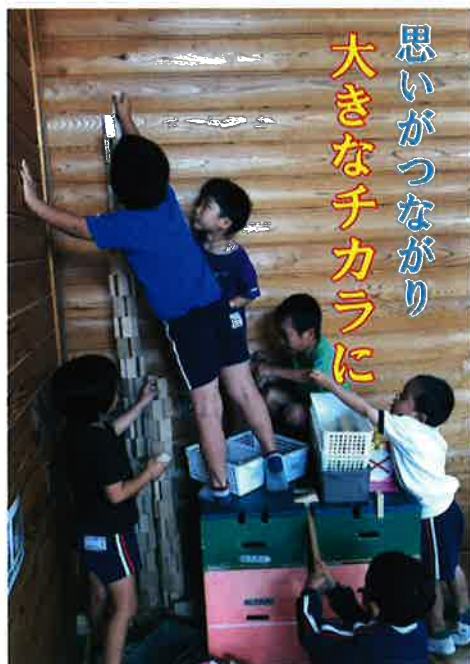
3・4・5歳児クラスのこの日のおやつは、キントトという袋に入ったお饅頭でした。

一生懸命開けようとしている4歳児クラスのR君。R君は始め自分のおやつが開けられず隣に座っている同じ4歳児クラスのY君に頼み開けてもらいました。そのあと写真には映っていませんが、R君の向かいに3歳児クラスのA君が座っていました。A君は自分のおよつの袋が開けられずにいて、自分で開けられなかったので、R君に「あけて」とお願いをしました。R君は、頼まれたことがうれしかったのか、A君の為に一生懸命袋を開けようとしていました。そんな表情が見られた一枚です。

光徳保育園



## (ウ)「協同性」



### エピソード

最近の子どもたちの様子を見ていると、積み木コーナーが発展しています。壁には、歴代の子どもたちが作った作品とそのお友だちを撮った写真が貼ってあります。

その写真の中の一つを目標にし、みんなで見ながら共通の目的に向かって力を合わせて作っている姿をポスターにしました。

下にいる子から、上にいる子に積み木を渡して、どんどん積み上げていき、共通の目的を持って、積み木に思いも乗せて繋げていくということと、一人ではできないことがお友だちと協力したらできるということから、キャッチコピーを『思いがっつながり 大きなチカラに』にしました。

にのみや認定こども園

## (エ)「道徳性・規範意識の芽生え」①



### エピソード

2歳児が公園のブランコに殺到しました。「危ないからここで待っててね」と保育者が言うと、ノンタンの絵本のように待っている子どもたちが数を数えはじめます。乗っている子も「待っているから、代わってあげなきゃ」と気付く場面です。待っている子も乗っている子のブランコに乗りたい気持ちが分かっているから待てるという一枚です。こうやって相手の気持ちに気づこうとすることが、道徳につながっていると思い写真を撮りました。

三茶こだま保育園

## (工)「道徳性・規範意識の芽生え」②



### エピソード

0・1歳児は、発達別に同じ空間で過ごしています。

普段の様子として、0歳児の子は活発でいろんなことに興味を示します。1歳児の子は月齢が高くお姉さんのように関わる姿が見られます。この写真の場面は、0歳児の子が玩具を投げている姿を見て、1歳児の女の子が「だめよ～」と声を掛けている姿です。

自分の経験から1歳児の子が0歳児の子に「玩具を投げたらお友達に当たって危ないよ」ということを伝えており、いい場面だと思いポスターにしました。

恵・YOU 保育園

## (才)「社会生活との関わり」



### エピソード

祖父母の集いがあり、あやとりをしました。

あやとりが得意な子が、自分のおばあちゃんじゃないけれど、教えてあげているところです。

最初はぎくしゃくしていたけれど、だんだんと距離が縮まってきました。

中島ゆうし保育園



### (カ)「思考力の芽生え」



#### エピソード

ある日、保育室に飾ってある青く染まったバラに興味を示した子どもたち。(どうやって染まったのかな?) そんな子どもたちの興味から、年長さんの子どもミーティングで話合ってみることにしました。「絵の具で染まるんじゃない?」という意見から、保育室中にある白い花を集め、色水につけてみることに……。しかし、2、3週間経っても花の色は変わりません。

再び(どうして染まらなかったのかな?)と話し合い。そして、「あ! 食紅を使って染めるって図鑑に書いてあった!」という意見も。早速子どもたちとスーパーで食紅を、花屋さんで花を買いにいきました。

これは実験を再開した時の写真です。わくわくドキドキ真剣なまなざしです。試行錯誤をしてきた子どもたちの願いはついに叶い、実験は大成功でした!

わくわくの森保育園

### (キ)「自然との関わり・生命尊重」



#### エピソード

これは、1歳児クラスの散歩の写真です。園から10分のところに神社があり、たまに遊びに行きます。落ち葉を集めて、降らせシャワーにしたりして自然のなかで遊んでいます。

この写真は、1歳児クラスの子が、右手にどんぐり、左手に葉っぱがついているどんぐりを持っています。葉っぱのついたどんぐりを見つけて「ひー!」と驚いて見せてくれました。

にのみや認定こども園

(ク)「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」



エピソード

この写真は、敬老の日の手紙を書いている場面です。

この男の子は、まだ文字を書くことへの興味が薄く、普段は自分の名前を書くことも精一杯で、書けない字は先生が描いたものをなぞっていました。

しかし、この日は自分で「おばあちゃんに手紙を書きたい！」という想いが強く、「【は】はどれ？」「～って書きたいんだよ」などと周りの子や先生に聞いたり、あいうえお表を見たりしながら、お手紙を書いていた。この日はみんなが書き終わってしまって、最後の1人になっても、自分が納得いくまで続けていました。

それまで道具として使っていた文字が、「伝えたい」「つながりたい」という思いから、この子の中で、1歩先に進んだ瞬間です。

にのみや認定こども園

(ケ)「言葉による伝え合い」



エピソード

異年齢(3、4、5歳)クラスでイス取りゲーム中、席の取り合いが生じました。お互い譲れず複雑な表情をしている子を見て、一緒に遊んでいたお友達が「どうしたの?」「どうしたかったの?」と気持ちを一生懸命聞き出してくれました。実は声を掛けている子も同じ経験を乗り越えたお友達です。時間はかかりましたが、お互いの気持ちを自分の言葉で伝え合い調整する姿がありました。

駒沢こだま保育園



## (コ)「豊かな感性と表現」



### エピソード

1歳児クラスの出来事です。子どもたちが「外を見たい」と言ったので、しばらく眺めていると1人の子が雲を指さし、「お魚だー」と言い、他の子にも「お魚がいる」と教え始めました。ほかの子たちも雲を眺め、どれが魚に見えるか伝え合います。

いるまこども園

## MIMAMORU アプローチ

- 子どもの存在を 丸ごと信じただろうか。
- 子どもに真心をもって 接しただろうか。
- 子どもを見守ることが できただろうか。

## 子どもの育ち ～MIMAMORU アプローチ～

監修 保育環境研究所ギビングツリー  
代表 藤森 平司

発行 長崎県 見龍塾  
初版 2019 (平成31) 4月15日

表紙デザイン 藤森 平司  
イラスト 石井 マキ  
制作スタッフ

西村 承品 みのりこども園  
竹内 尚史 あぜかりこども園  
水田 明光 ながた保育園  
谷口 剛 こむかえこども園  
田崎 睦之 形上保育園  
谷口 大輔 ゆりかご保育園  
徳田 周吾 もりやまこども園  
伊藤 勝 昭徳こども園  
前田 英範 たのしかこども園

編集協力

臥竜塾